

第1章 戦場

旭川市での終戦

一番の思い出は飯当番と整列びんた

林 茂さんのお話から

○現役 召集されて所属部隊に入り、軍務に従っていること。また、その将校や兵士。

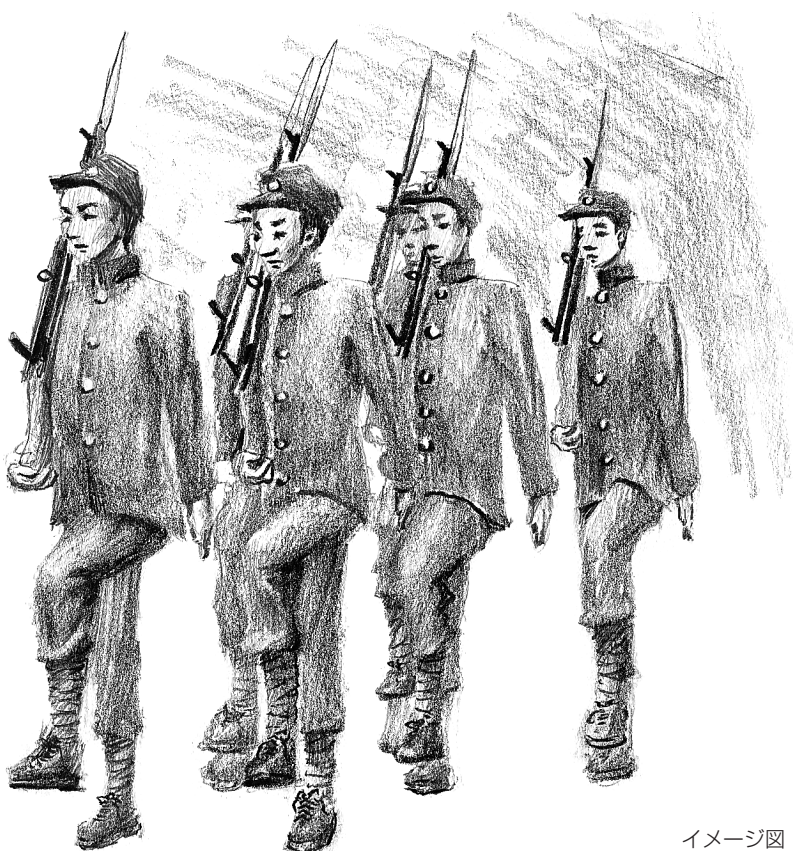
○赤紙（赤色の紙を用いた）軍の召集令状。

○銃後報国後援会 出征兵士の留守宅や戦死者の遺族に対して、慰問や生活の扶助活動をする部落会や町内会、婦人団体のこと。

私は、昭和二十年（一九四五年）二月、終戦の年に現役で旭川の七師団に入隊しました。その頃は、毎日当たり前のように二部隊、三部隊と戦地に出発して行きました。私もやっぱり行かなければならない、行かされるんだなと思って覚悟をしていましたが、結局戦争に行かずに、旭川で終戦を迎えました。

軍隊では、本当に厳しい教育を受けました。私の場合は、赤紙が来てから入隊するまで一か月半ぐらいありました。とにかく、当然のように戦争に勝たなければならぬ、戦争に行かなければならないという気運の中でしたが、いやな気持ちはありませんでした。

出征の時は、まず学校に集まり、その後神社に参拝してから、学校でセレモニーを行いました。それは、銃後報国後援会という会で、例えば、出征する人が四人いたら、代表が元気に行つてきますとあいさつをし、部落会長も



イメージ図

学徒出陣

○服役 ふくえき 兵役などに服すること。

○学徒出陣 がくとしゅしん 太平洋戦争下の一九四三年、学生・生徒の徴兵 ちへいへい 猶予 よ を停止し、陸海軍に入隊・出征させたこと。

○びんた 他人のほおを手のひらで打つこと。「びんたを食う」「往復びんた」

○下士官 士官・准士官と兵の間に位置する武官。旧陸軍では曹長・軍曹・伍長、旧海軍では上等・一等・二等兵曹。

あいさつをした後、学校の一年生から高等科まで全員が並んで、「勝ってくるぞ…」という歌を歌って、送ったものでした。戦場ではつらくても、その場面が目には浮かんて、一生懸命に耐え抜いてその期間を服役した、やり終えたということになるのです。いくら日本の国のためとは言え、私はチョンガー（独身男性）でしたから、半分は光栄、行かなければ男ではないという気持ちがあったので、何とも思わなかったのですが、家族を持っている人、子どもがいる人だったら、どんなにつらいことか、シヨックだったことか、本当に大変だったと思います。旭川を出て現役で行く時は、私たちは四人くらいで行きました。しかし、みんな同じ隊ではなかったもので、二部隊、三部隊と分かれました。旭川まではいっしょに行って、旭川の駅の広場に集合で、そこで部隊ごとに分けられました。私は九部隊でしたが、知っている人は誰一人いませんでした。部隊は、九州の人が多かったのです。学徒出陣で、九州の大学生の角帽をかぶっていました。私たちのように、戦闘帽をかぶっていたのは十分の一もいませんでした。そこで、私はとても苦勞したのですが、学科ではさすがにみんな大学生なのでよくできるのです。ところが、外へ出て演習をする場合には、やっぱり私の方が強いのです。少しぐらいのことでは、へたばらないという負けな面もありました。

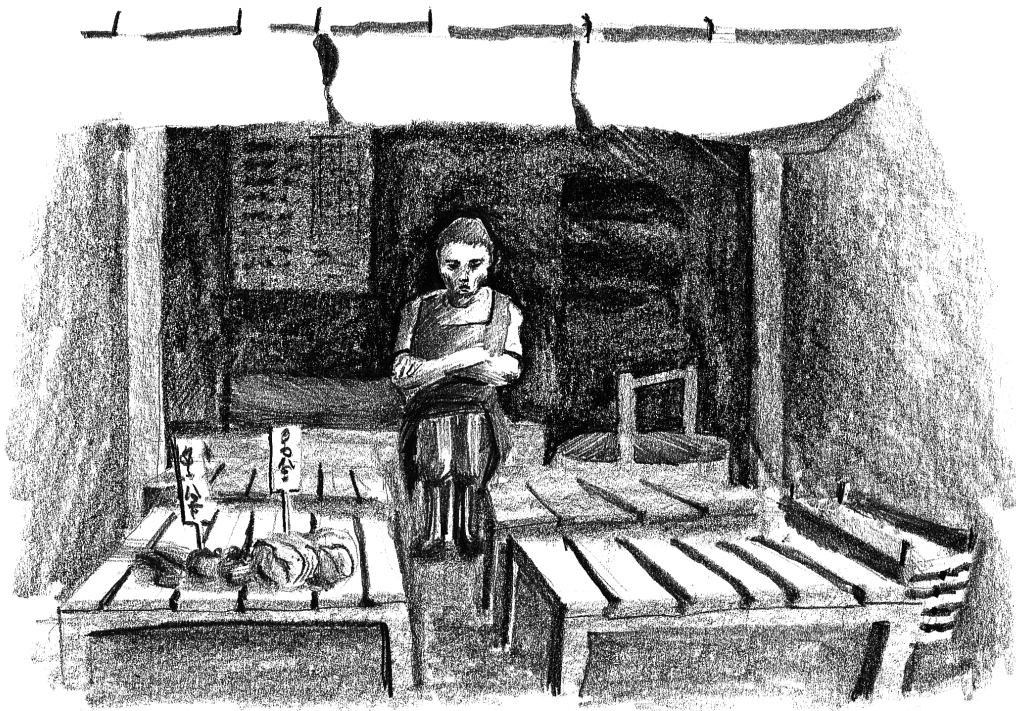
思い出と言え、何と言っても食料、食べ物には本当に不足してしまいました。食器に入れた決まった物と量だけで、毎日毎日戦争の訓練を続けたので、やっぱりやせてしまっ、大変でした。それから、私たちは五十人一部屋だったのですが、班付きという下士官がいて、一人が悪いことをすると全員が「整列びんた」でした。これは何十回もなぐられました。

どういいう悪いことをするのかというと、一番思い出すのはご飯の時です。五、六人で当番があり、炊事場から運んできたものをテーブルの上でみなさんにつぐのですが、つぐ時に、腹は

減^へっているし、たくさん食べたいから、自分のものだけは、上は平らで高くないけれども、押し^おつけて盛り^もつけるのです。そして、それを自分のところに置いておくというわけです。そうすると、ちゃんと二階^{はん}から班^{はん}付きの人が見ていて、すぐに整列^{せいれい}びんたをやられました。これがとても痛い^{いた}こわい思い出です。それから、悪いことをすると、旭川^{あさひかわ}の練習場^{れんしゅうば}を駆け足^{かあし}です。結構^{けつこう}広いので、へとへとになりながら駆け足^{かあし}をやりました。

実際^{じっさい}に戦争^{せんそう}の弾^{たま}の中をくぐったことはないで、その怖^{こわ}さの実感^{じつかん}はわかりません。でも、私^{わたくし}はこの軍隊^{くわいけん}に入った経験^{けいけん}から、社会人^{しゃかいじん}になつてから非常^{ひじょう}に役に立ったことがあります。『我慢^{がまん}に耐^たえること』、『やる気^{やるき}になつてやるという根気^{こんき}の精神^{せいしん}』です。だから、少しぐらいのことで、昔の言葉^{こころ}でいうとへこたれない、ダウンしない、たくましい精神^{せいしん}が身に付いたと思います。物を大事^{だいじ}にする、我慢^{がまん}する、

これは、やはり軍隊教育^{くわいけんくわういく}を受けた人は違^{ちが}うと思います。筋金^{すしがね}が入^いっていると思います。食料^{しょくりょう}はつくつても強制的^{きやうせいてき}に何時^{なんじ}、私の記憶^{きおく}では、特に大変^{たいへん}だったのは食料^{しょくりょう}と医療^{いりょう}です。食料^{しょくりょう}はつくつても強制的^{きやうせいてき}に何



野菜不足^{やさいふそく}の八百屋^{やちや}

イメージ図

○強制供出 無理な求め
に^お応じて差し出すこと。
○凶作 天災や気候不順
のため、作物のみのりの
ひどく悪いこと。
凶作^{きようさく}⇄豊作^{ほうさく}

○テロ 政治目的のため
に、暴力あるいはその脅
威^いに訴^うえる傾向。また、
その行為^{こうゐ}。

俵^{わとう}を供出^{きゅうしゅつ}しなさいと言われて出さなければなりませんでした。特に私^{わたくし}たちが帰った昭和二十
年、これは何年に一度の凶作^{きようさく}で、米がとれなかったので大変でした。まちの方に米はありま
せん。ですから、やみ米と言って、農家の方へわざわざ買いに行くのです。それから、うちの
おばあさんはたばこが大好きでしたが、農家ですらも、たばこや酒など、ほかのものも配給で
した。終戦のころ、七月末から八月初めごろは、雰^{ふん}囲^い気^きとしても演習^{えんしゅう}などしなくなったの
です。何か、私^{わたくし}たちの軍隊全体がだらけたと言いますか、楽になったのです。これは帰る前
に聞いた話ですが、司令部のえらい方々は、負けるということがわかっていたらしいのです。
終戦を聞いた時は、「情けない、残念だ。」という気持ちと、「よかったな」という気持ちが半々
でした。これで帰れるな、戦争に行かなくて済^すむと正直に思いました。

家にもどってきたのは、一週間ぐらい後でした。やはり、家
族は喜んでくれましたし、私^{わたくし}もうれしかったです。私^{わたくし}は無事
に帰れたけれども、戦死された方は気の毒で、戦争は二度とや
るものではないと思っています。今でも、日本はなくても、世
界的にいろいろな国でテロの問題が起きています。だから、世
界中が平和になってほしいと思います。あまりにも豊^{ゆた}かな時代
になり過ぎてしまいました。今、景気が悪い、景気が悪いと言っ
ていますが、この時代なら本当に喜ばなければならぬので
す。なかなかこのように世界がずっと平和とはいきません。だ
から、絶対^{ぜったい}に戦争は起こしてはならないのです。

DATA

平成20年度清田区平和事業
聴き取り

- ・平成20年12月18日
- ・清田区役所



林 茂(はやし・しげる)さん

- ・大正14年(1925年)生まれ
- ・札幌市清田区在住